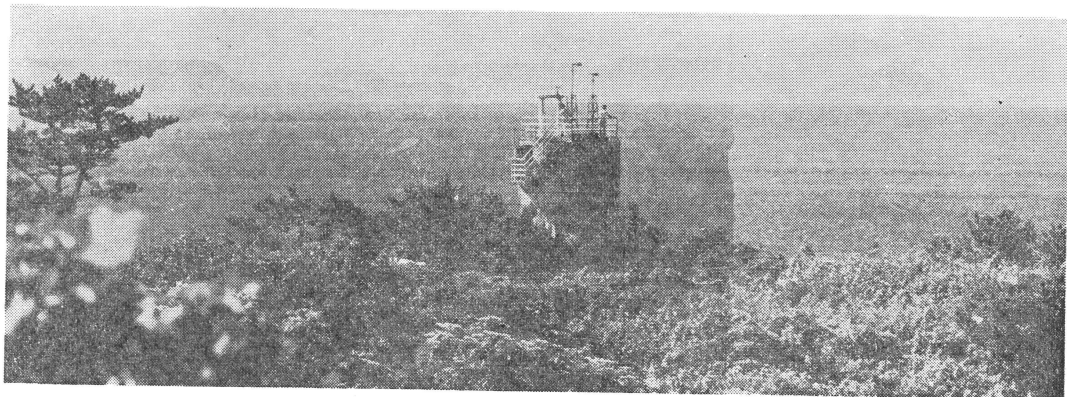


地方だより

三宅島測候所



三宅島より伊豆半島を望む。望遠200mmで小森技官撮影
(此のように本土の見えるのは年数回です)

当測候所の創立は昭和15年の大噴火の翌々年です。東京を南に180km、黒潮の中に浮ぶ三宅島は周囲約35km、伊豆七島中3番目の大きさで、測候所創設の経緯が物語るように、有史以前からしばしば噴火を繰り返してきた火山島です。島全体に噴火の爪跡があり、明治7年には測候所の東僅か、300m付近の山腹から噴火していて、安全な場所がないともいえる程です。しかしこれまでの噴火をみると、雄山の山頂を中心として放射状に走る多数の地質構造上の弱線にそって起こる一種の割れ目噴火を特徴としています。

昨昭和37年8月24日の噴火は津々浦々の注目の的となりましたが、また今年4月から山頂で新噴気が出始めたので、島民はまたかと心配をし、われわれは火山観測を続けて雄山の動向を見守っています。

海岸の大部分は20mないし50mの海蝕崖になっているため良港に恵まれず、いまだに上陸には舢艀によっています。入港地は天候に左右され、常時変更しなければなりません。全島の人口は6,200、天草採取は日本一の生産

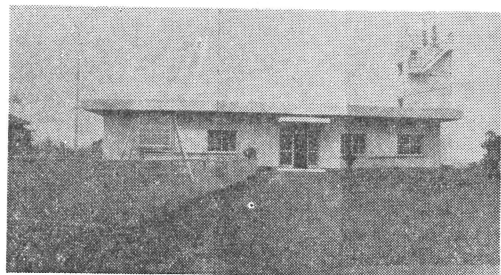
高を誇りますが、他に目立った産業はなく、生鮮食料品をはじめ生活物資は東京から5日に一度の連絡船で運ばれるので生活環境には恵まれません。最近、飛行場の建設が自衛隊の手ではじまりました。

しかし、風光はまことに明媚で、古い噴火口が潮水となった大路池、新澤池の神秘的なたたずまい、七島中第一の景観といわれる三池浜などがあり、天気の良いときには、本土をはじめ、大島、利島、新島、式根島、神津島から八丈島まで眺望できることもあります。

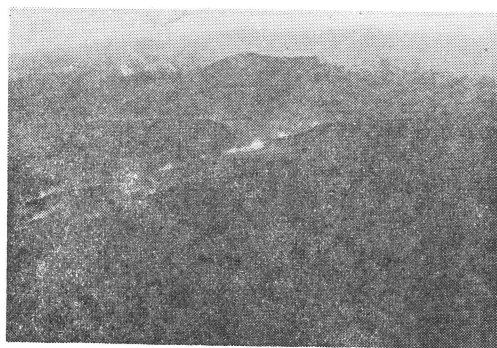
三宅島音頭

1. ハアーアー 都はなれて あこがれのせて
夢のまにつく 夢のまにつく三宅島
ホンニヨイトコ コラヨイトナー
2. 三宅よいとこ みどりの島よ
小鳥さえずる 小鳥さえずる 唄の島!

伊藤正三 記



三宅島測候所全景



三七山の蒸気 昭和37年の噴火跡。
38.6.11. 今も蒸気は生きている